

自由南アフリカの声

Voice of Free South Africa

2001年5月

No.26

発行 / アジア・アフリカと共に歩む会

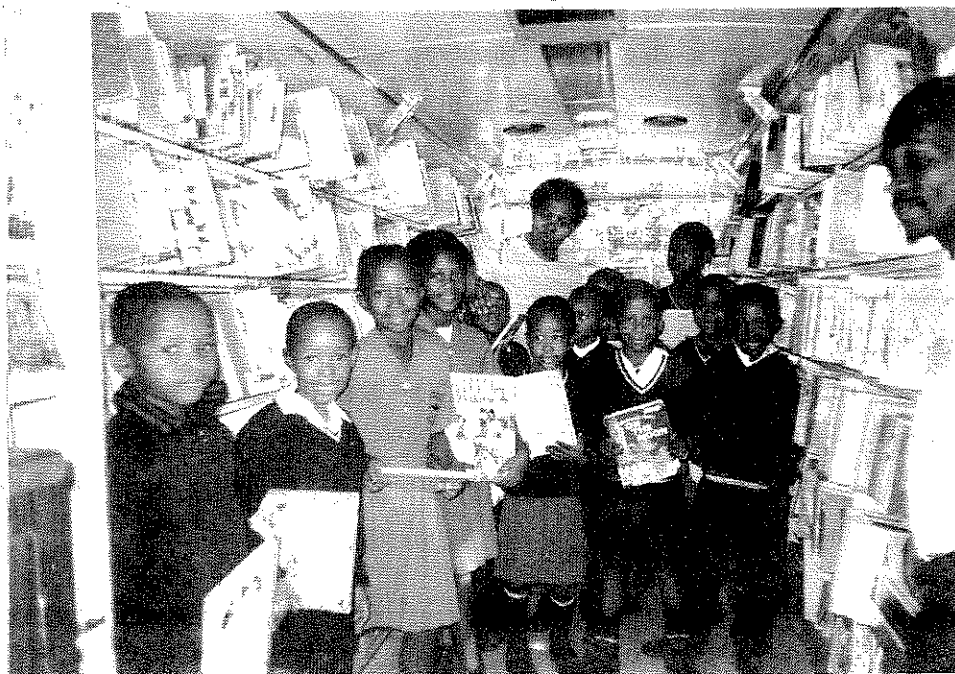
Published by Together with Africa and Asia Association (TAAA)

2001年5月の報告

- 2月富士宮市より移動図書館車引き取り
- 3月南ア講演とフリートークの会催す
- ケニアへ本2箱送付
- 南アBLLへ本など79箱送付
- 学童バッグ1000個南アELETへ送付
- 4月Tシャツ3680枚ボツワナの孤児施設へ送付
- 松伏町より移動図書館車引き取り

目次

最近の活動から	2
南アフリカの歴史①	4
ある南ア女性の生い立ち	5
新聞記事より	6
会員からの便り・活動報告	7
寄付をくださった方々	8



「本、大好き！」移動図書館内で デベトン 2001年4月

最近の活動から

野田千香子



☆ エイズ、犯罪、新しい風

アフリカでは、エイズが猛威を振るっている。この10年間でどうして、こんなことになってしまったのだろう。南ア政府は、安い治療薬の入手、予防、基礎医療に本気で力を入れてほしい。南アの犯罪多発が報じられる一方で、4月15日の朝日新聞で、松本仁一編集委員は、「貧困は相変わらず続いている。その中から、独自の経済が立ち上がり始めたように見える。住宅の需要が増え、零細のれんが工場が繁盛している。スーパーマーケット、乗り合いタクシー……。昔と違って努力をはばむ壁はない。アパルトヘイトが終わるといのは、こういうことなのかもしれない」といっている。

Tシャツ3700枚の寄付を受けた。TAAA会員のルンギレの紹介で、悲惨な状況にあるボツワナのHIVの孤児に贈ることになった。利用先と手続きの調査に数ヶ月を要したが、送り出すことができた。次回には、現地の様子を報告できると思う。

☆ 学童バッグ

このところ、本以外の物品の寄付のお申し出が続き、図書援助の合間にできる限り物品を生かしていきたいと努めている。公文教育研究会から寄付された学童用バッグ1000個はダーバンのELETを通じて学校の生徒のご褒美に使ってもらうことになった。送料相当の寄付金も公文グループから受けた。

☆ 本を BLL へ

岡山の部落解放同盟が南アで活動しているBLLに初めて本を送った。BLLの藤田真紀さんたちは自由州の南東部クワクワに図書室を用意している。ローカルチームの寄付によるもので12畳一部屋と6畳二部屋に水洗トイレもついている。藤田さんからのメールによれば「地域の学校長たちとも話してみました。勿論、学校には本が少なくて困っているので学校に送られてくることになって大歓迎です、ということです。

ただ、まずは地域のライブラリーという形で始めるほうがよいのではないかということになったので、とりあえずはこの建物から出発して着実に必要な人びとへ浸透できればよいなあと思います。」

☆ TAAA-ELET 協同学級文庫プロジェクト

ダーバンのELETとは8年の付き合いになる。南アのNGO一般の苦しい経済状況の中でELETはなんとかが持続し、私たちの送った本も利用しながらSLOTプロジェクト(School Library Outreach Training Project)を実践している。昨年はスタッフの給料として100万円を送金した。今年はカギの掛かる小さな本箱を学級に一つ二つと増やしていく活動をELETと共に広めていきたいと協議中である。

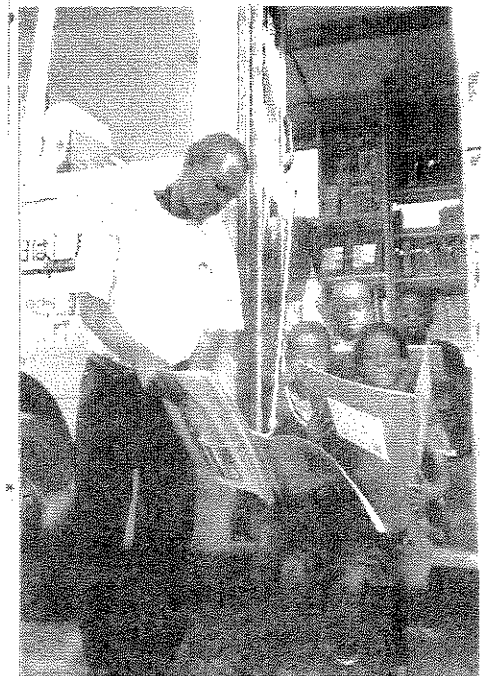
☆ 車3台保管中

現在、車3台を保管している。埼玉県上里町、松伏町、静岡県富士宮市で使用されていた移動図書館車である。送付先は慎重に検討していきたい。

☆ 西ケープ州からの報告

TAAAが寄付した2台の移動図書館車と在南ア日本大使館が寄付した書庫と車庫の開始式がエルギンコミュニティカレッジで2001年5月30日に行われる。西ケープ州教育省は、図書館車サービス対象の学校に対し、75万円の本とコンピューターソフトウェアを購入し、ソア移動図書館プロジェクトに75万円を助成した。プロジェクトのマネージャーであるジューン・パーツェスは報告の中で次のように言っている。

「特に非識字率の高いソア地域に移動図書館車2台いただき、心から感謝しています。西ケープ州の教育大臣は各学校に1日に1時間は読書の時間を設けるよう義務付けています。大臣は開始式でスピーチをすることになっています。プロジェクトは建物への日本大使館の助成金のおかげで大成功となりました。今度のイベントの写真と新聞記事をお送りします。ソア・プロジェクトは今年後半に始まるでしょう。子供たちからの感謝の手紙もその時、送ります。生徒たち、教師たち、成人の学生たち、幼稚園児一同から、もう一度、あなたにお礼を申し上げます。



左上／本を返却する生徒
左下／読書指導について協議する
MEIのスタッフ
上／運転手兼助手アブサローと生徒たち

いずれもデベトン移動図書館で
2001年4月

<学んでみよう、南アのこと>

南アフリカの歴史①

下谷房道 (高校教諭)

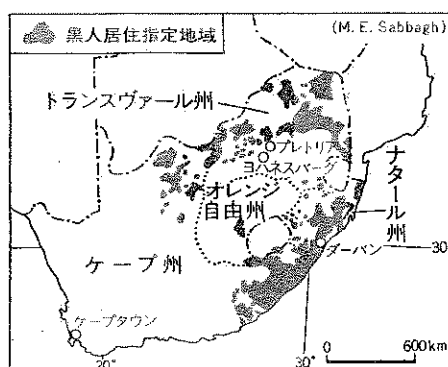
「無人だった南部アフリカに白人と黒人が同時にやってきたのだ。」これはアパルトヘイト体制下の白人の主張である。はたして事実なのか。歴史はアイデンティティに関わる問題である。本稿ではおおざっぱではあるが南アフリカの歴史をまとめてみた。

紀元前数千年の太古から狩猟民族のサン人、さらにそれに遅れて遊牧民族のコイサン人が南部アフリカに広く居住していた。サン人とコイコイン人などをあわせてコイサン人とよぶ。バントゥー語系のアフリカ人(コーサやズールーなど)がこの地に現れた時期は、今から1000年前という。(峯陽一氏『南アフリカ 虹の国への歩み』による。なおバントゥー語系民族の南下の時期は論者によって異なるようだが白人より早かったことは明らかである。)

大航海時代に入り、ポルトガル人はインドをめざしてアフリカ南端の岬を越え、その岬を喜望峰と命名した。続いて新興国のオランダがケープに現れたのが1652年。オランダもインドへの中継地としてこの地を求め、入植を始めた。入植者のうちには信教の自由を求めてオランダに流入していたフランス系も含まれ、彼らがぶどう酒の醸造の技術を伝えた。入植した人々はカルビン派を受け入れた新教徒が多かった。彼らが南アフリカで強力な選民思想を持つオランダ改革派の教会を持つことは後のアパルトヘイト政策との関連上、興味深いことである。彼ら入植者はボーア人(農民の意)と呼ばれ、先住のコイサン人の土地を侵略しながら勢力を拡大していった。その過程で混血が進み、現在カラードと呼ばれる人々のもとを形成した。

フランス革命後、正式には1814年のウィーン会議後、ケープ植民地はオランダ領からイギリス領に代わった。おおざっぱに言って南アフリカには2つの白人社会がある。一つはヨーロッパ大陸系のボーア人の社会で農村の農場主、工場労働者、鉱山労働者などである。今一つは「新参者」のイギリス系で都市の製造業、金融、鉱業など経済の根幹を握っている。両者は同じ白人として連携もするが、同時に深い溝を横たえる微妙な関係を保ってきた。イギリス系の圧力を受けてボーア人が北東の方向に移動したのが有名なグレート・トレックである。ボーア人はバントゥー語系のアフリカ人と戦いつつトランスヴァール、オレンジの2つの共和国を建国した。この両国で金とダイヤモンドが発見されるとイギリスは最初の帝国主義戦争ともいわれるボーア戦争をおこし南ア全土をその統治下に置いた。1869年にスエズ運河が開通しており、アジアへの中継地としての重要性は急速に薄れていたが、金とダイヤモンドの発見はこの土地に新たな価値を与えた。セシル・ローズはイギリス帝国主義下の世界政策(3C政策)を推進し、金とダイヤモンドで巨富を得た。野間寛二郎氏はボーア戦争を「餌物をめぐる2頭のライオンのあらしい」と規定されている。

なお、ナタールには強力なインド人社会が築かれているが、これは19世紀中頃プランテーション(サトウキビ)労働者としてインド移民が流入したものである。ボーア人からすれば「イギリス人が連れてきたやっかいもの」というところらしい。



(次号につづく)

①南アフリカ共和国のかつての黒人居住指定地域 州名は旧州名である。

この原稿は、さる3月4日に開催された「南アの歴史とフリーターキングの会」で「南アフリカの歴史を振り返って」と題して下谷さんにお話いただいた内容の要約です。わかり易い大変好評でしたので、改めて会報用に書き直してもらいました。

ある南ア女性の生き立ち

私の名前はベッシー（仮名）で、ホワイトシティ出身です。自分でも泣きたくなくなるような悲しい私の歴史を、どこから話し出しているのか分かりません。1992年にイテケンで学校に通い始め、スタンダード1の時、祖母と兄弟4人と暮らす私の所に、継父が逃げ出した母を探しにやってきました。祖母が母の居場所を知らないと言っていると、継父はひどく怒り出し、祖母を殴り始めました。

その出来事の後、祖母は重病になり亡くなりました。祖母の葬儀後も、継父は母を捜して続けていました。ある日、継父が私のもとにやって来て、私と兄弟4人の前で私達を皆殺しにしてやると言いました。裏手の窓を使って、その場をなんとか逃げ出したものの、自分達の家がなかったために、その後居場所を転々としなければならませんでした。弟や妹の面倒を見なければならなかったため、学校に行くことができずでした。翌年、エバトンに移り住み、再び学校に通い始めましたが、学校に行けなかった期間が長かったために、かなりクラスに遅れをとっていました。

エバトンでは大所帯で暮らしていたため、居候の私達兄弟に満足な量の食べ物とは与えられませんでした。時折、兄が日雇いの仕事を探して、食べ物を買ってくださることもありましたが、それらは家の持ち主の家族にしか与えられませんでした。母は再び結婚をし、自分の子供の面倒を見ることを放棄してしまいました。私は弟妹の世話をし続けていましたが、後に結婚をしたため、ホワイトシティに暮らす叔母の元へと逃げ出す決意をしました。叔母に事情を説明して、一緒に暮らす同意を得ました。

叔母の家に暮らす間に、義叔父が私をレイプしようとしていました。そのことを叔母に告げると私が脅すと、その後私に対する義叔父の態度が豹変しました。居心地が悪くなり、私はボーイフレンドのもとへ身を移しました。その時、まだ私は学生で、生活は苦しいものでした。叔母の家での事態が悪化していることを目の当たりにしたボーイフレンドは、一緒に暮らそうと伝えてくれました。しかし、その彼はしばらくして他の女の子達と出歩きたし、私に暴力をふるい始めました。他に行くあてのない私はそれにたえなければならませんでした。仕事を心得、彼の家計に貢献できるようになると少し事態は良くなりましたが、今度は私が隣人の男性と関係を持っているのではないかと彼に疑われだしました。その後、私が作った食事を拒否するなど、彼の行動はとてつもない奇妙なものとなり、その居心地の悪

さに、私は叔父の家に戻る決意をしました。叔父の家に戻りましたが、私が職を失い家計を助けられなくなると、叔父は私に家を出て行けと言いました。そして叔母と共謀して、私に食べ物を与えないように隠すようになりました。

叔父の家を出て、私はボーイフレンドを探しては、その家に居候するといった生活を繰り返していましたが。彼らは、行き場がないことにつけこんで私に暴力を振るうので、私の生活は悲惨でした。中にはあまりにひどい暴力を振るって、刑務所行きになったボーイフレンドもいました。その後、望まれていないことは重々承知、実家に戻りました。母も新しい男性と上手くいかず、家に戻って来ました。母は気難しい人で、いつも喧嘩ばかりしていました。

ある日、私が街から戻ってくると、部屋の真ん中にアイロン台が放置されていたので、誰がそうしたのか尋ねました。私が従弟のの仕業だと言ったので、従弟が戻ってきた時、元の場所に戻すように言いました。すると母は自分の家でもないのにしゃしゃり出た振る舞いをするなど罵倒しはじめ、私を突き飛ばしました。私は自分の身を守るために母を押し返した時、母は打ち身ができたと言って、警察に通報しました。私を刑務所に送るために、母は警察を連れて家に戻ってきましたが、私は逃げだして無事でした。

私の所に従弟が訪ねてきて、警察が捜しているのだから、家には戻って来ない方がよいと教えてくれました。再び行くあてのない生活が始まり、知人の家を転々しました。数週間後、警察の捜査は打ち切られたので、実家に戻って来てはどうかと知らせてくれました。しかし、自立するために部屋を借りる決意でいたので、家には戻りませんでした。今でも1人暮らしをしていて、マカセさんに勧められたリモホ（プロジェクトを行うグループの名前）の活動に携わっています。このプロジェクトによって、私の生活が少しでも良い方向に向かうことを祈っています。

この文章は「BL Lプレトリアオフィス 1999年度活動報告書」より、ハウテン州オレンジファームで行われている「アレコバネングプロジェクト」のワークショップ参加者の自己紹介の中から抜粋させて頂きました。（アレコバネングとはストゥ語で“力を合わせよう”の意味）BL Lは、地域の女性達を中心に、さまざまな技術習得のための自助プロジェクトを支援しています。



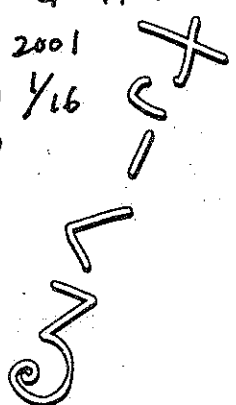
南アの子供に本を

「アジア・アフリカと共に歩む会」代表・野田千香子さん(61)は、南アフリカの子供たちのために英語の本を送るなどの支援活動を続けている。きっかけは、野田さんが8年前にANC(アフリカ民族会議)東京事務所でボランティアで働いたこと。そこで知り合った女性から、アパルトヘイト(人種隔離政策)下での黒人居住区の貧しい教育事情などを聞き、国内で眠っている本を生かしてもらおうと始めた。現在では県内のほか、東京都や神奈川県内の会社員や教員ら約20人のメンバーがあり、本のこん包などの作業を行っている。

アジア・アフリカと共に歩む会

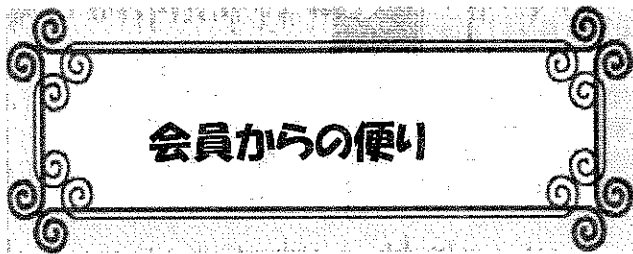
8年間で送ったのは、英語の本や教科書など約17万冊。送られた本は、南アの各州の教育省などから各学校に分配されている。また国内の市役所などで利用されていた移動図書館用のバスを譲り受け、再整備して南アに送る活動も行っている。現在では11台の移動図書館が現地でも利用されている。

毎日新聞
2001
1/16



移動図書館で選ばれた本を選ぶ先生たち





会員からの便り

◆ボランティア経験ゼロ、国際NGOなんて雲の上の人々、と思っていた私がTAAAに関わりはじめて約1年。この間にも早、「始めて良かった」と励みに感じる事がいくつもありました。例えばメンバーが無理をせずに思い思いのペースで活動していることや、パソコンも英語もいまいちの私にさえできる仕事（本の梱包）があったことなどで

す。が、何よりの励みは、本を手にした南アの子どもの輝く笑顔です。

私にも本好きの娘がおります。この頃は、本に耽る娘の姿に南アの子どもの顔を重ねて見えています。本はそこから文字や言葉を学べるだけでなく、物事への感心を広げてくれたり、さらには淋しさや不安を紛らせてくれたりする心の友でもありましょう。TAAAから本が届くのを楽しみにしている子ども達も、いつかは南アの国作りを担う日がやってくるのだな、その時この本が巡り巡って何かの役に立っているといいな、などと考えながらやっています。

安部弥生

◆私は現在、NHKの労働組合（日本放送労働組合、略称：日放労）の専従役員をしています。

TAAAへの参加も組合活動がきっかけでした。日本のように企業内労働組合ですと、とかく企業や組織の内部論理に陥りがちで、グローバルな視点に欠けるという弱点があります。そこで日放労では、一人ひとりの多様な知識や能力を、職場だけでなく、地域や国際的な活動へ自主的に参加するなかで幅広く発揮していこうという運動を展開しています。そのようななかで、私自身は、TAAAの活動に参加するようになりました。

私は、専門知識や特別な能力も無いばかりか、むしろ参加するたびにTAAAの皆さんの熱意に圧倒され、たくさんの刺激を受けています。そして、もちろん南アの教育支援という目的はありますが、活動を通じて「自分を育てる」ことの素晴らしさも感じ始めています。今後も可能な範囲で活動に参加し、皆さんとのつながりを深めていきたいと思っています。

佐藤 朗

◆南アフリカ共和国に黒人主体の政府ができて間もなく7年になります。この間一方では、自由に活動する黒人ビジネスマンや黒人中流階級が増えてきたようです。しかし、他方旧黒人居住区には、アパルトヘイト時代そのままの貧しさが残っています。こうした南アフリカ共和国の社会構造を見据えながら、明るい南アフリカ共和国建設に寄与するために地道な支援活動を息長く継続されるTAAAに心から敬意を表します。自分の係わり方の小ささに悪びれずに私も息長くTAAAとの係わりを大切にしたいと考えております。

寒川尚周（岩手県花巻市）

◆ 主な活動

(2000年12月18日～2001年4月15日)

- 12/26 クワズルーナタール州へ車出港
- 1/8 会報25号編集会議 山田玲子 野田千香子
- 1/13 梱包作業と新年会 浅見克則 北爪健一 野田山田 安部弥生 工藤睦子 ルンギレ・シファンピリ 小宮山明子 住所シール準備 小宮山
- 1/16 本74箱 ELETへ出荷 野田
- 1/22 富士宮市図書館訪問、車の件 工藤
- 1/23 会報25号発送 井出利栄
- 1/24 教育NGOネットワークの設立会に出席 野田
- 1/29 アメリカンスクールインジャパンより本引き取り 浅見
- 2/15～16 富士宮市へ車引き取り、工場へ 工藤 山縣
- 2/24 梱包作業 浅見 野田 北爪 工藤 山田 下谷房道
- 2/27 富士宮よりの車を工場から駐車場へ移動 浅見
- 3/4 当会主催「南アの歴史とフリートーカーの会」 講師 下谷房道 会議 野田 下谷 浅見 久我祐子 安部
- 3/6 南アBLLE本その他79箱出荷 野田
- 3/8 公文教育研究会よりバッグ寄付の話で清水氏来訪 野田
- 3/14 Tシャツ送付準備のため康貿易の倉庫へ 下谷 野田
- 3/18 Tシャツ梱包作業 下谷 小宮山 野田 浅見 山田 ルンギレ夫妻 26号編集会議 野田 山田
- 3/26 公文のバッグ1000個ELETへ出荷 アメリカンスクールインジャパンより本引き取り 浅見
- 3/28 ケニアに本105冊送る
- 4/10 埼玉県国際交流協会へ2000年度の報告書提出 野田
- 4/15 梱包作業 浅見 野田 下谷 安部 山田